

事業名：学力向上拠点形成事業

学校名：三原市立三原小学校

所在地：三原市館町2丁目3番1号

H P：http://www.mihara.ed.jp/mihara-es/

生徒数：16学級 441名

1 研究の概要

(1) 研究テーマ及び研究のねらい

①研究テーマ

読む力を育てる国語科指導方法の開発
－「対話」と「体験」を通して－

②研究のねらい

PISA型「読解力」では、単に文章の内容を理解するだけでなく自分の考えをもち表現するなど、テキストを理解し、利用し、熟考する能力が求められている。そこで、「対話」と「体験」を通して、文学教材を中心に、児童が自らの考えをもち、表現し合いながら読みを深める指導方法の在り方を研究する。

(2) 研究組織・体制 ※省略

(3) 研究内容

①研究の仮説

国語科の授業において、対話と体験を通して読む指導方法の工夫を行えば、読む力を育てることができるであろう。

②研究の方法

- 「読む力」とは指導要領の内容項目の達成を図ることとする。
- 「対話」による指導方法の工夫
 - ・「自己内対話」【個人思考】の充実
教材を読んで、自分の考えをもつ。
児童が自分の学力の向上を自覚する。
 - ・「児童間対話」【集団思考】の充実
児童が互いの考えを交流し、読みを深める。
- 「体験」による指導方法の工夫
 - ・学年の発達段階に応じた教材との「体験」化を図る。

【低学年：同化体験】

体験化の視点：登場人物になりきって読む
ねらい：場面の様子について、想像を広げながら読むことができる。

【中学年：対象化体験】

体験化の視点：感想や意見をもって読む
ねらい：場面の移り変わりについて、叙述を基に読むことができる。

【高学年：典型化体験】

体験化の視点：自己の人間性と重ねて読む
ねらい：登場人物の心情、性格、考えなどを多面的に読むことができる。

2 授業改善の視点

(1) 学習課題の明確化

- ・活動目標の設定（例：本の帯をつくろう、朗読をしよう、評論を書こう等）

(2) 読みの「体験」の明確化

- ・学年に応じた読みの体験化の視点の設定

(3) 自己内対話

- ・指導のねらい及び個々の学習後の向上がはっきりとわかるワークシートの工夫

(4) 児童間対話

- ・おさえるべき叙述の明確化
- ・話し合いを焦点化し、新たな学びを生み出す話し合いの工夫

(5) 学習形態の工夫

- ・児童の意欲と学力に応じた習熟度別学習の設定

(6) 評価の工夫

- ・おさえるべき叙述とそこから想像させる事柄の明確化による評価と指導の一体化

3 研究の成果と課題等

(1) 成果

- 図1及び図2から、児童の読む力の向上が見られたことにより、低学年の同化体験、中学年の対象化体験、高学年の典型化体験は、児童の発達段階に合っており、児童の読む力を培う上で有効であった。
- 自己内対話及び児童間対話の場を設定することにより、児童が自分の考えをもち、互いに表現し合いながら読みを深めることができた。

図1 【全学年：「読むこと」の単元の評価規準 達成状況】

- ・97%の児童が単元の評価規準を達成している。

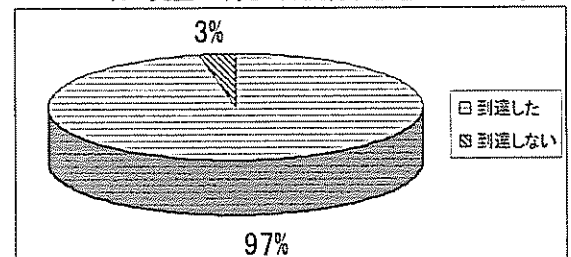
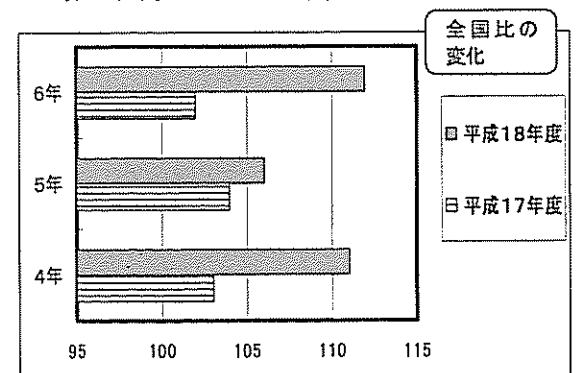


図2 【「読むこと」における研究開始前と研究後のCRTの変化】（第4学年以上）

- ・第4学年以上で研究開始後、数値が上昇している。



(2) 課題

- 児童間対話において、児童の発言を整理しながらねらいに迫るための授業の構成力について課題がある。今後も授業研究を中心に研究を進める。
- 自分の思いをきちんと話すことや効果的に書くことなどの指導方法の研究も進め、表現力の向上を図る。

(3) 今後の改善方策

- 本年度の授業研究において、授業の構成に視点をしぼり、発問と発言の改善点を研修する。
- 日々の授業において、児童の発言や作文などを題材に自分の考えを表現する力の育成を図る。

4 実践事例

(1) 第5学年 国語科

(2) 単元の紹介

①名作を読み味わおう～蜘蛛の糸・トロッコ～

②単元の目標

場面の移り変わりや情景を叙述をもとに想像しながら読み、二つの作品の主題を考える。

(3) 授業改善のポイント

①指導形態の工夫

学年2クラスを習熟度別3グループに分けた。

A：ブックカバー・本の帯グループ（2組担任）

B：朗読グループ（1組担任）

C：評論グループ（指導方法工夫改善）

②教材提示の工夫

芥川龍之介の「トロッコ」「蜘蛛の糸」の2作品を比べて読むという教材提示の工夫を行った。

③言語活動の工夫

各グループの学習内容や評価基準は共通化し、ねらいに向けて習熟度を加味した言語活動を工夫した。

(4) 授業の様子

【C：評論グループの例】

①このグループを選んだ児童の実態

・読むことの能力が高い。意欲があり、じっくり考えることを好む。読書量も多い。

②単元における指導の内容

- ・「トロッコ」「蜘蛛の糸」を読み、初読の感想をもつ。
- ・2作品を読み、場面ごとの内容と登場人物の心情をワークシートに整理する。
- ・評論に書くための1回目の構成表を書く。
- ・全員の構成表から新たな学習課題を見つける。
- ・2作品の学習課題を話し合い、主題を考える。
- ・2回目の構成表を書く。
- ・構成表をもとに評論を書く。（2作品について）

③個々の読み取りの状況を構成表で把握する工夫

序論	本論	結論
序論	本論	結論
序論	本論	結論
序論	本論	結論

上段(ステップ1)

→初めの段階の読みの把握

下段(ステップ2)

→学習後の読みの把握

序論→作品の概要

本論→叙述とそこから想像

できる心情

結論→2作品の主題

ステップ1からステップ2の記述で見る児童の変容

【A児の例】ステップ1の記述

結論(主題)

「蜘蛛の糸」は人を思いやること、「トロッコ」は人間の強さだと思う。

ステップ2(学習後)の記述

結論(主題)

作者は「蜘蛛の糸」では「命」がかかっている時、「いっしょに行こう」とか「先ににげて」といえない人間のみじめさ、「トロッコ」では人生の暗さ、そしていつかどっつきものがある、ということを伝えたかったと思う。この2つの作品に共通していることは、人生や人間について書かれていることと、最後の場面に意味があるということだと思う。

④典型化体験による読みの深まりの例

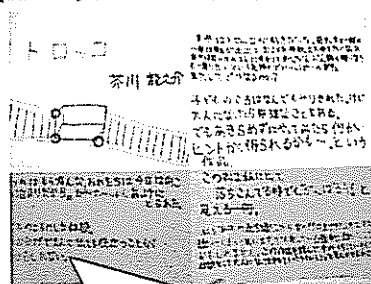
『蜘蛛の糸』＝自分がかんただったらどうだろう。

自分がかんただったら、他の罪人たちといっしょに上がろうとは思えない。これが無慈悲と書かれているが、人間だったらまちがいなく「下りろ」と言うか自分だけ助かろうとする。作者はこんなことを分かっている、できない人間の悲しさをお釈迦様の様子に表したのではないのかと思う。だから、主題は、「人間は、人をぎせいにしていかなければ生きられない、かわいそうなもの」ということだと考える。

『トロッコ』＝自分が26歳の良平だったらどうだろう。

「全然何の理由もないのに？」という作者の問いかけは、作者は答えをもって読者に問いかけていると思う。それは、「薄暗いやぶや坂のある道」「じん労につかれた」という叙述から、8歳の体験が26歳になっても影響しているということだと思う。26歳の良平は毎日疲れている。その良平の目の前に暗い道が現われるということである。自分が良平だったら人生はつらいものだ、あの体験は人生と重なると思う。だから、この作品の主題はトロッコの体験が人生に関係しているんだよということだと思う。

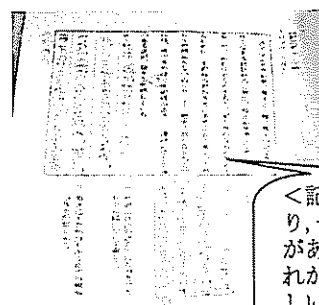
【A：ブックカバー・本の帯グループの例】



帯には
・大切な叙述
・自分の考え
ブックカバーには
・主題
以上の点を記載

<記述例>子どものころの体験。そのおかげで大人になって役に立つことがあるかもしれない。

【B：朗読グループの例】



朗読シナリオをつくらせたらどんな記述を付け加えるかを書いた。(最後の場面)

<記述例>それは道が切れたり、つながったり、悲しいことがあるといいこともある。それが人間の人生だと思う。苦しいことを乗り越えればいいことがあるだろう。

(5) 成果と課題

①成果

- どのグループも叙述に即して主題にせまる学習ができた。また個の変容を見取る工夫ができた。
- 児童の学習後のアンケートから、グループ別学習の肯定的評価は95%であった。児童の実態に応じたグループ別学習が有効であったことが分かる。

②課題

- 文章の内容を理解するだけでなく、書きぶりを評価したり自分の考えを述べたりする学習活動への発展を位置付ける。